

養子を育てる幸い

中野島キリスト教会牧師 國分 広士・初穂

＊家庭が家庭本来の機能を果たせなくなっている時代だ。そういう家庭の子どもたちを、育てる施設もあるにはある。しかし実の親に育てられていない子のためには、里親や養親の果たす役割も小さくはない。

養子を育てる家族にはいろいろなケースがある。日本では、「自分たちに実子が与えられないので」または「困っている家を見るに見かねて」という夫婦が多いよ

うだ。

しかし、國分牧師夫妻は、独身時代から養子を育てたいというビジョンがそれぞれに与えられており、ビジョンの一致を見たことが結婚に導かれた大きな要因だったという。

聞きたい人には誰にでも喜んで養子を育てる幸いを話しますという御夫妻を、編集者が川崎市多摩区の中野島キリスト教会に訪ねた。

広士 宣教師のダビデ・マーティンさんという方が、三人の実子を育てたあとで二人の養子を育てたという証しを若い頃に聞き、すばらしいことだと感心し自分もそうしたいと強く思いました。

しかし、結婚を願う年齢になっても、その願いを共有する人にはなかなか出会えませんでした。ある時、大学生だった初穂にも同じ願いがあることを知らされました。結婚を考える際、これが大きな決め手になりました。

初穂 私は、大学で社会福祉の勉強をしていまして、その中で『親とは何か』という本を読みました。著者はクリスチャンではありませんが、そこには、親に育てられない子を育てる施設には限界がある、家庭で育てることに意義がある、ということが書いてありました。

施設で働いている保育士さんたちが里親さんの家庭を見学して、『ああ、家庭で育てるとはこういうことなんだ！』と一つの発見をする場面がありました。『子育てというのは、仕事ではなく生活なんだ』という言葉で書いてありました。

施設は、普通は中学までです。

望めば高校までいられますが、子どもには生涯親が必要です。福祉のほうでも、『小舎制施設』とか『グループホーム』とか『里親』とか、より家庭に近い環境が注目されるようになって、今も進められています。私も、『小舎』とか『グループホーム』で働きたいとも思いましたが、できれば自分の家庭で子どもを育てたいと思っていました。

＊初穂さんは、以前高校生伝道をしていた広士さんを見ていて、福音を伝える働きを手伝いたいと思ったが、それと家庭で子どもを育てるビジョンがどう一致していくのかは、すぐには分からなかった。しかし、話しているうちに、広士さんにも「養子を育てる」という願いがあることを知り、二人は神さまの導きを確認していく。初穂さんが大学三年生の時だった。

初穂 私たちに最初に与えられた子どもは流産に終わりました。悲しかったけれども、を通して、どんな命も神さまの許しなしには

存在しないんだ、と分かりました。のちに与えられた子どもたちも、神さまに与えられたという重みを感じます。

産んだから親なんだというより、育てて行く中で親子であることを実感して行くんだということを学びました。だから、自分が産んでいなかったとしても、育てて行く中で親子になって行けるというのを、私はすごく感じました。

＊幸ちゃん、生後十一日目に國分家に来た。初穂さんには、なんの迷いもなかった。本当の親子になって行けるという自信があった。事実、六年たって上のお兄ちゃんたちと同じきずなが築かれている。

力君（高二）、巖君（中一）、仰君（小五）たちも、幸ちゃんを妹として分け隔てなくかわいがる。

広士 実子を育ててから養子をとる順番は、ダビデ・マーティン宣教師の影響もあります。子どもは普通の家庭で育てるのが一番いいと私は思っています。

上の子たちを育てている間に時が流れ、三人目の男の子が幼稚園

に入る段階で、これ以上先延ばしすると我々の年齢から言っても養子を育てるのはむずかしくなると考え、二人で相談して「小さないのちを守る会」に志願しました。志願をしたら、改めて『面接をします』と言われました。

初穂 結婚する前から小さいのちを守る会の会員でしたし、辻岡先生ご夫妻の出席しておられる立川福音自由教会のナーサリーに、うちの男の子三人とも通っていました。辻岡夫人がスタッフをしておられましたので、すでに親しい関係でした。



辻岡ご夫妻（後ろ）と幸ちゃんを抱く助産師さん、初穂さん（産院にて）

